令和8年度　自己評価計画書

	具体的取り組み	主担当	現状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考
1　多様な進路志望に応じ、生徒が主体的に未来を切り拓けるように3年間を見通した進路支援体制の充実を図る。							
①	生徒一人ひとりの学びや活動の記録、振り返りを活用した個別最適な進路支援を行う。	進路支援課 各学年会	進路志望に寄り添いながら、様々な可能性を提供する面談や進路行事を実施している。進学や就職など多様な進路に対して、より適切な情報を提供することに加え、面談シートなどを導入することで生徒が主体的に面談や進路行事に参加できるようにしていきたい。	【満足度指標（生徒）】 生徒が、志望する進路について主体的に取り組むことができている。	面談や講演会等のキャリア教育を通じて、進路意識を高めることができた生徒の割合が A　98%以上である。　B　95%以上である。 C　90%以上である。　D　90%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 面談や講演会などを通じて、進路意識を高めることができたの問いについて「とても」「どちらかといえば」の割合が 1年　89.7%　2年　88.1% 3年　87.2%　平均　88.4% （第2回学習実態調査）
②	進学（大学・短大・専門学校）・就職・公務員・留学など、多様な進路志望に対応した支援体制を整える。	進路支援課 3年学年会 各教科	多様な進路のニーズに対応するため、教科の補習に加え、自学の環境を提供している。集中できる環境と、学習方法に言及したガイドラインを提示することでそれぞれの進路実現に向けて主体的に取り組む力を養っている。志望実現に向けて教員のサポート体制をより高めていきたい。	【満足度指標（生徒）】 進路実現を図るための効果的な取組ができている。	放課後補習は効果的であると思う生徒の割合が A　90%以上である。　B　80%以上である。 C　70%以上である。　D　70%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 放課後補習は効果的かの問いについて「とても」「どちらかといえば」の割合が78.4% （第2回学習実態調査）
③	様々な入試方式に対応する中で、進路実績の向上を図る。	進路支援課 各学年会 各教科	担任による丁寧な面談に加え、教員全員が特別選抜に携わることで、細やかな指導を実現している。過去に指導した大学に対する面接等の指導法を体系的なものにしていくことで持続可能なものとしていきたい。 共通テストで求められる力と二次試験で求められる力を分析し、計画的な指導につなげたい。また通常の授業に加えて、放課後学習を通して、学習集団の育成に力を入れ最後まで自分たちを高める雰囲気を醸成したい。	【成果指標】 生徒が志望する進路を実現することができている。	国公立大学合格者数が A　50人以上である。　B　45人以上である。 C　40人以上である。　D　40人未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 国公立大学合格者数は45名（現役43）
				【成果指標】 生徒が志望する進路を実現することができている。 難関大：10大,東外大,お茶大,筑波大,広島大,慶応大,早稲田大	金沢大学と難関大学の合格者数合計が A　15人以上である。　B　10人以上である。 C　5人以上である。　D　5人未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 東北大学1名（既卒） 金沢大学10名
2　学習に対する生徒の意欲を高め、学習内容の確実な定着を図るとともに、生徒が一人一台端末や学習支援ツールを効果的に活用し、「主体的・対話的で深い学び」を実現できるように支援する。							
①	「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、教員の教科指導法等の技能を高める。	教務課 各教科	一人一台のchromebook導入により、一人ひとりが考えながら授業に取り組む機会が増えた。教科会の時間を時間割上に盛り込み、研修や教育課程研究集会へ参加し、学んだことを教科内で共有できる時間の確保を行う。	【満足度指標（生徒）】 授業における活動によって、自分の考えを深めることができている。	授業におけるさまざまな活動によって、自分の考えを深めることができたという生徒の割合が A　95%以上である。　B　90%以上である。 C　85%以上である。　D　85%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 国語　92%　地公　95% 数学　92%　理科　96% 保体　93%　英語　93% 情報　89%　平均　93% （生徒による授業評価）
②	家庭学習調査および学習実態調査を通じて、生徒の学習状況を把握し、担任と教科担任が情報交換しながら、生徒の自律的な学習を促す。	教務課 各学年会 各教科	家庭等で自主的に学習する時間が十分とは言えない。アンケートから、スマートフォン利用時間が多いことが原因であると生徒自身も自覚している。わかっているけどやめられないを、全教職員で支援していきたい。	【成果指標】 自律的な学習の定着を図る。	家庭等で自主的に学習する時間が十分確保できていると考えている生徒の割合が A　70%以上である。　B　50%以上である。 C　30%以上である。　D　30%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 平日・土日の家庭学習時間について十分学習していると考えている生徒の割合が 1年　33%　2年　26% 3年　38%　平均　32% （学習実態調査A3）
③	一人一台端末を活用し、生徒同士が意見を共有・比較・深め合う授業を実践する。	企画推進室 各教科	授業におけるGoogle Workspace、ロイロノート、モノグサなどの学習支援ツールの活用は普及している。Classiやエナジードなどのツールを活用することで、生徒の状況や躓きを把握し、主体的・対話的で深い学びにつながるような、より効果的なICTツールの活用を目指す。	【満足度指標（生徒）】 学習支援ツールを主体的、効果的に活用することができている。	自らの学習のために学習支援ツールを主体的、効果的に活用している生徒の割合が A　90%以上である。　B　80%以上である。 C　70%以上である。　D　70%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 学習に役立つように学習支援ツールを活用することができている教員の割合が86% （教員アンケート）

３　専門的な外部人材の活用や大学との連携を通じて、探究的・教科横断的・実践的な学びを強化する。

①	教科の枠を越えた課題解決型の探究学習を実践する。	企画推進室 各教科	教科横断型授業に取り組む教員や、それを支援する教員が増加してきた。学校全体として、実社会の課題解決につながる学びを深めることを目指し、日常的な実践としての教科横断型授業の普及を目指す。	【努力指標】 教員同士が協働して授業改善を図っている。	教科横断的な授業の実践や見学を複数回行った教員の割合が A　65%以上である。　B　60%以上である。 C　55%以上である。　D　55%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 教科横断的な授業の実践や見学を複数回行った教員の割合が　59% （教員アンケート）

４　様々な生徒が主体性を発揮できるように、部活動や生徒会活動の活性化を図るとともに、地域との連携に努める。

①	様々な生徒が主体性を発揮できるように、部活動や生徒会活動の活性化を図る。	生徒支援課	部活動や生徒会活動に主体的に取り組んでいると考える生徒の割合は高い。教員の効果的な支援により主体的な活動がより良いものになるようにしていきたい。	【満足度指標（生徒）】 生徒が、部活動や生徒会活動に主体的に取り組むことができている。	部活動や生徒会活動に主体的に取り組んでいると考える生徒の割合が A　90%以上である。　B　85%以上である。 C　80%以上である。　D　80%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 生徒が部活動や生徒会活動に主体的に取り組むことができるように支援している教員の割合が　100% （教員アンケート）
②	いじめのない学校づくりを目指し、共通理解に基づいて、全教職員がいじめの早期発見・早期解決に向けて連携する。	生徒支援課 保健相談課 各学年会	いじめの問題への基本姿勢を教員間で定期的に共有している。日常の指導に加え、年3回のアンケートや個人面談を通して積極的に情報収集と指導を行っている。	【努力指標】 全教職員で共通理解を図り、早期に対応する。	課題のある生徒に対して、学年会や教育相談、生徒指導などが迅速かつ十分に連携している教員の割合が A　95%以上である。　B　90%以上である。 C　80%以上である。　D　80%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 課題のある生徒に対して、学年会や教育相談、生徒指導などが迅速かつ十分に連携している教員の割合が　86% （教員アンケート）

５　今年度導入されるSKY(Seiko Knowledge Yard)を活用し、生徒の主体性を引き出すために、新たな取り組みに積極的に挑戦する。

①	今年度1学年に導入されるSKY(Seiko Knowledge Yard)を活用し、生徒の主体性を引き出す取り組みを行う。	SKYコーディネーター 1学年	SKYは新しい教育課程となる1年生の授業単位数減に伴って新設された学校独自の取り組みである。対象は1年生のみとなるが、1年学年団を中心に様々な部署と連携を図り、生徒の主体性を引き出すことができるように企画・運営を行いたい。	【努力指標】 生徒の主体性を引き出す新たな取り組みに挑戦する。	SKYの時間を活用し、生徒の主体性を引き出す取り組みを行うことができたと考える教員の割合が A　70%以上である。　B　60%以上である。 C　50%以上である。　D　50%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	新規

６　教職員のウェルビーイングを目指し、業務の精選・効率化・平準化に努めるとともに充足感を感じることができる働き方改革を進める。

①	ICTを活用して業務の効率化、精選に取り組む。	管理職 全員	Sゼミの廃止など、業務の効率化・平準化を目指して取り組んでおり、これまでの取り組みが仕事への意欲と充足感に結びついていることがうかがえる。今後も業務の効率化・平準化をさらに進め、確保したゆとりが質の高い教育活動へと循環するような働き方を推進していきたい。	【努力指標】 業務の効率化を図り、教職員のウェルビーイングを目指す。	自分の時間が確保でき、充足感につながる働き方に近づけることができていると考える教員の割合が A　70%以上である。　B　65%以上である。 C　60%以上である。　D　60%未満である。	C，Dが出た場合、主管課で原因を分析し、実施方法を再検討する。	昨年度 自分の時間が確保でき、充足感につながる働き方に近づけることができているかの問いについて「あてはまる」、「ややあてはまる」の教員の割合が 62%